

近世和歌の世界

宗政五十緒 監修
柳瀬万里 編
村上明子

近世和歌の世界

宗政五緒 監修
柳瀬万里 編
村上明子

まえがき

本書は近世和歌、すなわち、江戸時代の和歌、に關心をもつ人々のために、その案内書となるように編んだものである。大学・短期大学、また、一般の古典講座などのテキスト・参考書として利用されることを予想している。

近世和歌は近時、国文学界において、とりわけ注目されるようになったジャンルである。しかして、その研究に志す人も逐次増加して来ているのが現状である。しかしながら、近世和歌の世界全体に亘って学習の手引きとなるような適当なテキストに、今日はなほだ乏しいうらみがある。

本書は近世和歌を狭く短歌の作品のみに範圍を限定しないで、その他の形式の、長歌・旋頭歌^{せどうか}・片歌^{かたうた}、また、狂歌・教訓歌・もの覚え歌・歌合^{うたあわせ}・歌集序文の類をも、併せて収載し、更に、歌論・歌学から注釈に及び、歌人伝や詠歌の見える紀行まで範圍を拡げて、一書に編んだ。このような近世和歌の案内書は、従来刊行されたことがなかったはずである。

本文の各部について少し解説しておこう。

まず、和歌の部では、総計百二十余人の歌人の作品を載せた。近世の主要な歌人はほぼこれで網羅されているはずである。加えて、従来の和歌史ではほとんど取上げられることのなかった歌人でも、注目されねばならぬ人はその作品を収めた。例えば、儒学者の伊藤仁斎、文人画家として有名な池大雅、その妻の玉瀾、国語学

者富士谷成章、幕末の漢詩人梅辻春樵、などである。これによって読者は、近世和歌の新しい地平をも発見しうるようになる。教訓歌・もの覚え歌は、従来の和歌史ではなおざりにされて来ていた分野である。読者は和歌の世界の広大さを、これらの作品からも窺うことができるであろう。

第二に、歌論・歌学の部においては、和歌の実作を支えている広くて深い基盤を、読者は知ることができるであろう。これらの作品は視野を拡げるならば、日本文化論に連続する領域でもある。

第三に、注釈の部では、近世において、古典和歌がどのように理解されていたかを知る資料の例を載せた。近世に著述された注釈書の多くは、今日においても、なおかつ、生きて研究者に利用されているのである。

第四に、歌人伝には三人の歌人の伝を『近世畸人伝』によって収めた。伝を執筆した伴蒿溪は寛政京都地下歌人の四天王の一人と称された人、歌人の叙述した歌人伝である。

第五に、紀行の部は、和歌を点在させた散文の例として一部を立てた。韻文と散文——和歌と和文——とで織りなす構造的な文学の世界を読者は享受するであろう。

巻末に近世和歌史を概観するための解説論文四篇を付した。

なお、本文ページには図版・挿絵を数多く掲載しているので、近世和歌の世界のもつ楽しさを、これによって読者は味わって欲しい。

本書をひもといたことを機縁として、読者が更に新しい次元において、近世和歌の広大な宇宙に遊泳されることを、われわれは期待している。

昭和六十四年二月

宗政五十緒

凡 例

一、本書は、江戸時代の初期から末期に至る、近世、の和歌、ならびに、歌論・歌学と、それに関連する作品とを収録して、近世和歌の世界全体を、読者が鳥瞰するに便利ならしめるように編集した。

二、本文は通読に便利のように、次のような校訂者の私意を加えた。

1、文字は現在通行の文字を使用した。

2、句読点と濁点・半濁点、および振り仮名、送り仮名には新しく加えたものがある。

3、和歌の部の仮名表記は歴史的仮名遣いに従った。

4、漢文の部分の返り点・送り仮名には新しく付したものがある。

5、仮名表記は適宜、漢字に改め、また、漢字表記を仮名に改めたものもある。

三、和歌の部に収載した作品で、歌題のないもの、また、不明のものには、歌題の代りに○印を付した。

四、歌論・歌学の部には次のような作品を収載した。

(イ)和歌入門 (ロ)和歌理論 (ハ)和歌学習 (ニ)枕詞研究 (ホ)歌学伝授 (ヘ)歌人逸話

五、上欄には、作品の出所とその作者についての簡略な解説を記し、また、注意すべき語句を掲出し、かつ、読解に資すると思われる事柄を注記した。

六、女流歌人の作品については長沢美津氏編『女人和歌大系』第三卷（私家集期）に負うところが多い。記して謝意を表する。

目次

まえがき.....宗政五十緒

凡例

一 和歌

1 短歌.....11

前期

細川幽斎12／三条西実条14／智仁親王14／中院通村15／烏丸光広16／後水尾院17／飛鳥井雅章18／
道晃法親王19／日野弘資20／烏丸資慶20／伊達政宗21／佐河田昌俊21／小堀政一22／藤原惺窩23／
木下長嘯子23／松永貞徳24／木瀬三之25／山本春正26／清水宗川26／元政26／北村季吟27／
望月長孝28／平間長雅28／有賀長伯28／下河辺長流29／契沖30／伊藤仁斎31／徳川光圀31／
徳川尋子31／戸田茂睡32／田捨女32／小野寺丹子32／柳沢町子33／井上通女33／中院通茂34／
後西院34／清水谷実業35／靈元院35／武者小路実陰38／中院通躬38／荷田春満39／烏丸光栄39／

後期

賀茂真淵 40 / 加藤枝直 41 / 似 雲 41 / 冷泉為村 42 / 涌 蓮 43 / 石塚倉子 44 / 武 女 45 / 阿 薰 45 /
田安宗武 45 / 加藤宇万伎 46 / 池 大雅 46 / 祇園梶子 47 / 祇園百合子 48 / 池玉瀾 49 / 荷田蒼生子 49 /
土岐筑波子 49 / 油谷倭文子 50 / 鶴殿余野子 51 / 小曾根紅子 51 / 牧野路子 52 / 澄 月 52 / 小沢蘆庵 52 /
伴 蒿隱 54 / 慈 延 55 / 楫取魚彦 55 / 上田秋成 56 / 本居宜長 57 / 富士谷成章 57 / 塙保己一 57 /
加藤千蔭 58 / 村田春海 59 / 荒木田麗女 59 / 菱田縫子 60 / 多田千枝子 60 / 松平定信 60 / 頰 靜 61 /
柳原安子 61 / 菊地袖子 61 / 清水浜臣 62 / 小山田与清 62 / 賀茂季鷹 62 / 香川景樹 63 / 木下幸文 65 /
熊谷直好 66 / 小野 務 66 / 良 寛 66 / 貞心尼 68 / 栗田土満 68 / 本居春庭 68 / 本居大平 69 /
伴 信友 69 / 平田篤胤 69 / 大倉鷲夫 70 / 平 久胤 70 / 橘 守部 70 / 鹿持雅澄 71 / 和田巖足 71 /
中島広足 72 / 海野幸典 72 / 梅辻春樵 72 / 千種有功 73 / 加納諸平 75 / 石川依平 76 / 平賀元義 76 /
久貝正典 77 / 橘 曙覧 77 / 伴林光平 77 / 安藤野雁 78 / 大隈言道 79 / 井上文雄 79 / 野村望東尼 79 /
本居藤子 80 / 松原三穂子 80 / 秋園古香 81 / 徳川吉子 81 / 静寛院宮 81 / 大田垣蓮月 82 / 高島式部 82 /
八田知紀 88

2 長 歌

加藤千蔭 84 / 加藤枝直 85 / 良 寛 86

3 旋頭歌

良 寛

4 片 歌

建部綾足

5	狂歌	90
---	----	----

『蜀山先生狂歌百人一首』

6	教訓歌	93
---	-----	----

『長者教』

7	もの覚え歌	94
---	-------	----

『小野篁歌字盡』94／朱引きの歌96／七草の歌96

8	歌合	97
---	----	----

『絵本真葛原』

9	歌集の序	100
---	------	-----

『林葉累塵集』序100／『琴後集』序104

	歌論・歌学	107
--	-------	-----

1	『初学考鑑』	武者小路実陰	108
---	--------	--------	-----

2	『古今和歌集正義』総論	香川 景樹	127
---	-------------	-------	-----

3	『新学異見』序	熊谷 直好	145
---	---------	-------	-----

4	『戴恩記』序	松永 昌易	148
---	--------	-------	-----

5	『聞書全集』	細川 幽斎	150
---	--------	-------	-----

6	『枕詞燭明抄』	下河辺長流	152
---	---------	-------	-----

三 注 釈

7	『烏丸資慶卿口授』	烏丸 資慶	158
8	『和歌打聴』	富士谷成章	162
9	『耳底記』	烏丸 光広	166
10	『溪雲問答』	中院 通茂口授	松井 幸隆筆記 168
11	『詞林拾葉』	武者小路実陰口授	似雲筆記 169
12	『古今伝授日記』	近衛 基熙	176
1	『古今和歌集』注釈		179
2	『小倉百人一首』注釈		179
(i)	吹からに秋の草木のしをるれば		179
(ii)	ちはやぶる神なび山のもみぢばに		185
(iii)	しら露のいろはひとつをいかにして		187
(iv)	たつた川にしきおりかく神無月		188
(v)	郭公なくやさ月のあやめ草		192
(vi)	音羽山おとに聞きつゝ逢坂の		198
(vii)	たちかへりあはれとぞ思ふ		199
(i)	山里は冬ぞさびしさまさりける		203
(ii)	いにしへのならの都の八重桜		209

(iii) ほととぎす鳴きつる方をながむれば……………217

四 歌 人 伝……………223

- 1 隠士 長流 『近世畸人伝』 224
- 2 僧 契沖 『近世畸人伝』 227
- 3 祇園 梶子 『近世畸人伝』 235

五 紀 行 文……………237

- 1 『辛酉紀行』 小堀 政一 238
- 2 『中空の日記』 香川 景樹 245

解 説……………253

- 一 近世和歌概説 柳瀬 万里 254
- 二 近世和歌の展開 宗政五十緒 261
- 三 近世歌論の展開 柳瀬 万里 268
- 四 近世和歌の枕詞 村上 明子 276
- 近世和歌史年表 村上 明子 283

一

和

歌

短歌 たんか

前期

1 細川幽斎

雲雀

鳴たつもむかふ野かぜをそむくとて雲にはのらぬ夕雲雀哉(衆妙集)

也足軒やそくけん一会興行の当座たうざに、夏遊浦うらにあそぶ

うきみるを道の行てにひろひてやあそびの浦の日を暮らすらん(〃)

智仁親王——一四ページ参照。

也足軒——中院通勝(一五五六—一六一〇)。通村の父。
うきみる——浮き海松。

古いにしへも今も変らぬ世の中に心のたねをのこすことのは(〃)

谷鶯

朝まだき霧吹きはらふ谷風たにかぜにまづうち出づるうぐひすの声(〃)

由己——大村由己。

由己亭ゆこていの会に、年内立春を

三条亜相実澄—三条西実枝。亜相は大納言の唐名。

くれて行年^{ゆく}のをだ巻くり返し今もむかしの春やたつらむ（ ）

はやくのことなりしに奈良にまかりて、三条亜相実澄めしぐせられ、手向山ちかき藤樹庵にて当座有しに、春旅といふ題をさぐりて

いざ桜花のぬさをや手^た向^{むけ}山^{やま}紅葉にあける神のこころに（ ）

月の頃越後国主上杉のなにがしにつかはしける

しろたへの月は秋のよかくばかりこしぢの山の雪もありきや（ ）

互^{たがひにしのぶこひ}忍^{しのぶ}恋

いかにせむ色にいでなば君と我ともに忍ぶの草はつむとも（ ）

田 鹿 細川まな

こひつる
かひもなれど
あはれなるは
きつるを
あはれなるは



細川幽齋（『集外歌仙』）

あひおもはぬ

おもふをばおもはぬをよのならひぞとしりてもまどふわが心かな(衆妙集)

2 三条西実条

天正三(一五七五)―寛永十七(一六四〇)三条西家第八世。公国の嗣子。従一位右大臣。家集に『三条西実条詠草』、著書に『詠歌聞書』。

公宴御月次九月廿四日

月前虫声

夜をへては霜とみるべき月影をしらすかほにもむしのなくらん

(三条西実条詠草)

海橋立(あまのはしだて)

右同月照古橋

古橋に海橋立はいかが候はん、外橋の字にても題により心もちる有べ候。ながらの橋はいかがなど沙汰候き

音もなくこえぬる波は月影に松のはしろき天のはしだて(〃)

萩如錦

花重くなびぎあひつつさく萩のにしきは風やたちかさぬらん(〃)

3 智仁親王

天正七(一五七九)―寛永六(一六二九)。後陽成天皇の皇弟。八条宮。桂宮とも称す。細川幽斎より古今伝授を受ける。『智仁親王詠草』・『智仁親王御記』などを残す。

花雲

かつらぎや峯のしら雲かさなるとよそには見ゆる花ざかりかな

萩露

秋風に待としらすな本あらの小はぎが露はよし重くとも(〃)

(新題林和歌集)

残雪

ふみわけんあとををしみてうす雪のけさだにたゆる宿の通路（〃）

八条殿智仁親王

陽正院 第五宮二品六郎卿
寛永六年四月廿日薨 年三十一歳 葬桂光院



沢村 朝こほりみる／＼消る涙水に 所もさらす情わかな哉 智仁

〔続眺望集〕

4 中院通村

檐 梅

天正十六（一五八八）—承応二（一六五三）。中院家第十五世。通勝の嗣子。正二位内大臣。母は細川幽斎女。家集に『後十輪院集』。

春の夜のみじかき軒端あけ初めて梅が香しろき園の朝風（後十輪院集）

首夏風

恨こし花はあとなき夏山の若葉すすしき木々の下風（〃）

月の歌として

わたつ海のかざしの浪のこす岩に光を花と月も散なり（〃）

鷹狩

夕まぐれうちちる雪もはしたかの毛花にまがふのべのをちかた（〃）

天正七（一五七九）—寛永十五（一六三八）。烏丸家第六世。光宣の嗣子。正二位權大納言。家集に『黄葉和歌集』、紀行に『春のあけぼのの記』。

しのびてひさしきこひ
忍 久 恋

年を^{とし}経^へてつ^なつ^みむ^な涙^みに袖^{そで}くち^て身^みにあ^こまる恋^{こひ}の限^{かぎ}りをぞ^しる（後十輪院集）

ある人また富士のゑの讃をのぞまれしに

ふじの嶺は雪の光に明そめて麓の雲に残る夜半かな（〃）

5 烏丸光広 からすまみつひろ

花の歌の中に

身のうさを忘れてむかふ山ざくら花こそ人を世にあらせけれ（黄葉和歌集）

初雁

雲間くもまゆく一つ二つの雁かりがねはまた難波津なにはづやはなち書かきする（〃）

後朝恋きぬぎぬの

別わかれてふ文字もじだにけさは書かきもえず硯すずりのうみの汀みぎはまさりて（新題林和歌集）

烏九殿光廣哪

准大臣允宜公男正二位權大納言
寬永十五年七月十三日薨六十
家集八黃葉集賢語數和論語名文十三種藏快書拾葉集

一多云乃
福至手
山之形
心之平
金之平
水之平
廣